

2017年度社会経済学初級 α 試験問題

(EA クラス松尾匡・EB クラス橋本貴彦)

試験日：2018年1月20日

*受験するにあたっての注意事項

- ・試験時間は60分です。
- ・持ち込み許可物件はありません。

以下の大問ⅠからⅢ（問1~問27）について別紙マークシートに解答を記しなさい。
配点 合計80点（内訳 問1~問25、問27は各3点、問25及び問26は1点）

I

ある星のある島では、生産手段としての「石炭」（単位は「トン」）と、消費財としての「食糧」（単位は「食」）の二種類だけの財が存在し、いずれも資本主義的様式のもとで生産されている。

「石炭」生産部門では、年々、500万トンの「石炭」と6000万労働時間の労働を投入して、2000万トンの「石炭」を総生産している。「食糧」部門では年々、「石炭」部門での純生産たる「石炭」すべてと、労働3000万時間を投入し、「食糧」1500万食を生産している。労働者は年間1人当たり「食糧」100食を受け取り、労働者一人当たりの年々労働時間は1000時間であるとする。このとき、次の各問に答えよ。

A（問1）この経済全体で見た場合の純生産はどれだけか。（問2）この経済での剰余生産はどれだけか。次の①~④のうち、それぞれ最も適切なものを一つずつ選んで、その記号を記入せよ。

- ① 「石炭」1500万トン、② 「食糧」600万食
- ③ 「石炭」1500万トンと「食糧」1500万食、④ 「食糧」1500万食

B 以下の文章の（問3から問7）にあてはまる数値を、下の数値群からそれぞれ一つずつ選んでその記号を記入せよ。

- ・「石炭」1トンあたりの投入労働量は（問3）時間である。
- ・「食糧」1食あたりの投入労働量は（問4）時間である。

問3と問4の数値群

- ①1 ②2 ③3 ④4 ⑤5 ⑥6

- ・労働者一人当たりの必要労働時間は（問5）時間である。

- ①400 ②500 ③600 ④700 ⑤800 ⑥900

- ・労働者一人当たりの剰余労働時間は（問6）時間である。

- ①400 ②500 ③600 ④700 ⑤800 ⑥900

- ・搾取率は（問7）である。

- ①1/3 ②2/3 ③1 ④3/2 ⑤2 ⑥3

II

ある星のある島は労働者と支配者からなり、島内で自給自足する経済が営まれている。生産物は、「コメ」と「サカナ」と「スシ」の三種類がある。労働者は全部で 10 万人で、コメ産業に 4 万人、サカナ産業に 5 万人、スシ産業に 1 万人が従事し、一人当たり年間 1000 時間労働している。

コメ産業では、年間 2 万トンのコメを種もみとして投入し、年々 10 万トンのコメを総生産している。サカナ産業では、年間 1 万トンのコメをエサとして投入し、年々 1000 万尾のサカナを生産している。スシ産業では、年間 1 万トンのコメと、200 万尾のサカナを原料として投入して、年々 20 万食のスシを生産している。労働者各自は年々、純生産されたサカナを労働者全員で均等に頭割りした分と、コメ 320kg (=0.32 トン) を受け取る。支配者は、残りのコメと、純生産されたスシ全部を受け取る。

A 上記の設定通りとすると、下記の各経済量はいくらになるか。下記の選択肢からあてはまる数値を選択しなさい。

(問 8) この経済全体で見た場合の純生産はどれだけか。そして、~~(問 9) この経済での必要生産物はどれだけか。~~さらに (問 10) この経済での剰余生産物はどれだけか。

次の①~④のうち、それぞれ最も適切なもの一つずつ選んで、その記号を記入せよ。

問 8 の数値群

- ①コメ 8 万トン・サカナ 1000 万尾・スシ 20 万食
- ②コメ 6 万トン・サカナ 800 万尾・スシ 20 万食
- ③コメ 10 万トン・サカナ 800 万尾・スシ 20 万食
- ④スシ 20 万食

問 9 の数値群 この島の必要生産物

- ①コメ 4.2 万トン・サカナ 1000 万尾
- ②コメ 4.2 万トン・サカナ 800 万尾
- ③コメ 3.2 万トン・サカナ 800 万尾
- ④スシ 20 万食

問 10 の数値群 この島の剰余生産物

- ①コメ 6 万トン・スシ 20 万食
- ②コメ 4.8 万トン・スシ 20 万食
- ③コメ 2.8 万トン・スシ 20 万食
- ④スシ 20 万食

- ・ コメ 1 トンあたりの投入労働量は（問 11）時間である。
- ・ サカナ 1 尾あたりの投入労働量は（問 12）時間である。
- ・ スシ 1 食あたりの投入労働量は（問 13）時間である。

問 11 の数値群 コメ 1 トンあたりの投入労働量

- ①100 ②200 ③300 ④400 ⑤500 ⑥600

問 12 の数値群 サカナ 1 尾あたりの投入労働量

- ①1.5 ②2 ③2.5 ④3 ⑤4 ⑥5.5

問 13 の数値群 スシ 1 食あたりの投入労働量

- ①100 ②110 ③130 ④140 ⑤150 ⑥160

- ・ この島の一人あたり必要労働時間は（問 14）時間である。
- ・ この島の一人あたり剰余労働時間は（問 15）時間である。

問 14 及び問 15 の数値群

- ① 170 ②270 ③400 ④480 ⑤520 ⑥600 ⑦730

B 上記に加えて労働者が各自年々スシ 1 食を受け取り、その分支配者の受け取るスシが少なくなっている場合は、下記の経済量はいくらになるか。

~~（問 16）この経済での必要生産物はどれだけか。~~（問 17）この経済での剰余生産物はどれだけか。

問 16 の数値群 この島の必要生産物

- ①コメ 4.2 万トン・サカナ 1000 万尾・スシ 10 万食
 ②コメ 4.2 万トン・サカナ 800 万尾・スシ 10 万食
 ③コメ 3.2 万トン・サカナ 800 万尾・スシ 10 万食
 ④スシ 10 万食

問 17 の数値群 この島の剰余生産物

- ①コメ 6 万トン・スシ 10 万食
 ②コメ 4.8 万トン・スシ 10 万食
 ③コメ 2.8 万トン・スシ 10 万食
 ④スシ 10 万食

- ・この島の一人あたり必要労働時間は（問 18）時間である。
- ・この島の一人あたり剰余労働時間は（問 19）時間である。

問 18 及び問 19 の数値群

- ①170 ②270 ③400 ④480 ⑤520 ⑥600 ⑦730

C 当初の設定（A）では、単純再生産だったとする。支配者の消費も労働者の入手する生産物も当初の設定通りとして、サカナ産業における労働生産性が上昇して、サカナ産業における直接労働投入が当初の 8 割にまで減っているものとする。今期の総労働量は当初の設定と同じで、浮いた労働はすべてコメの生産にまわるとすると、下記の経済量はいくらになるか（ただし今期首に投入するコメは、必要な分が支障なく調達できるものとする）。

- ・サカナ 1 尾あたりの投入労働量は（問 20）時間である。

問 20 の数値群 サカナ 1 尾あたりの投入労働量

- ①1.5 ②2 ③2.5 ④3.2 ⑤4.2 ⑥4.5

- ・この島全体で今期蓄積されるコメの量は（問 21）万トンである。
- ・この島全体の一人あたり剰余生産物は（問 22）である。

問 21 の数値群

- ①1.6 ②2 ③3 ④4 ⑤5 ⑥6

問 22 の数値群 この島の剰余生産物

- ①コメ 4.4 万トン・スシ 20 万食
 ②コメ 4.8 万トン・スシ 20 万食
 ③コメ 2.8 万トン・スシ 20 万食
 ④スシ 10 万食

- ・この島の一人あたり必要労働時間は（問 23）時間である。
- ・この島の一人あたり剰余労働時間は（問 24）時間である。

問 23 及び問 24 の数値群

- ①170 ②270 ③400 ④480 ⑤520 ⑥600 ⑦730

Ⅲ

次の文章を読み、適切な選択肢を選んでください。

・相対的剰余価値生産とは、社会全体で一人当たり平均労働時間と一人当たり平均財消費量が（問 25）したもとで、消費財の投入労働量が（問 26）することで、搾取率が上昇することを指す。

問 25 及び問 26 の選択肢

①増大、②一定のままで推移、③減少、④上下変動

問 27 本源的蓄積で作られる「二重の意味での自由な労働者」の「自由」に含まれるもので適切なものを下記の選択肢から二つ選べ。

- ①職業選択の自由
- ②生産手段からの自由
- ③生産手段を利用できる自由
- ④集会・結社の自由
- ⑤外国と交易する自由

(以上までが問題用紙です)

お知らせとお詫び

必要生産物についての設問である問 9 と問 16 に関しては、EA クラスと EB クラスとで授業内容が異なっていたことが判明したため、全員正答とします。

また、問 22 については以下のように問題文を訂正します。

正 この島全体の剰余生産物は（問 22）である。

誤 この島全体の一人あたり剰余生産物は（問 22）である。

以上の内容は、1 月 20 日の本授業の定期試験時間中にアナウンスさせていただきました。定期試験中での問題訂正となったことなど、受講生の皆さんにはご迷惑をおかけしましたこと、お詫びいたします。

I

問 1 総生産「石炭」2000 万トンと「食糧」1500 万食のうち、「石炭」生産のために 500 万トンの「石炭」が、「食糧」生産のために「石炭」生産部門内の純生産物すべてが投入される。これらを除いた残りが経済全体の純生産。よって、④。「石炭」産業部門内部の純生産と混同しないこと。

問 2 雇用労働総量は 6000 万時間+3000 万時間=9000 万時間。労働者一人当たりの労働時間は 1000 時間であるから、9 万人（9000 万時間÷1000 時間/人）が島全体で雇用されていることになる。実質賃金率は 1 人あたり「食糧」100 食だから、労働者が取得する生産物の総量は、「食糧」が、9 万人×100 食=900 万食となる。純生産物のうち、これを除いた残りが「剰余生産物」なので、②600 万食。

問 3 「石炭」産業部門内部での純生産は 1500 万トン。これを、直接間接に計 6000 万時間の労働で生産しているのだから、「石炭」1 トンあたりの投入労働量は、6000 万時間÷1500 万トン=4 時間/トン。よって、④。

問 4 「食糧」1500 万食を純生産するために、直接には 3000 万時間の労働投入が必要。また、間接に必要な労働は、「石炭」の投入量 1500 万トンにその 1 トンあたりの投入労働量をかければよい。よって、直接間接に投入される労働は、3000 万時間+1500 万トン×4 時間/トン=9000 万時間。これを「食糧」の純生産 1500 万食で割れば、⑥6（時間/食）。

問 5 労働者一人当たりの受け取りは、100 食/人。一人当たりの必要労働時間 V は、これに、「食糧」の投入労働量をかけて、 $V = 6 \text{ 時間/食} \times 100 \text{ 食/人} = 600 \text{ 時間/人}$ となる。よ

って、③。

問 6 労働者一人当たりの剰余労働時間 M は、一人当たり労働時間から必要労働時間を引いた残りだから、 $M=1000$ 時間/人 -600 時間/人 $=400$ 時間/人 (①)。

問 7 搾取率 (剰余価値率) は、 $M/V=400/600=2/3$ 。よって②。

II

問 8 社会全体の純生産物は、総生産から生産手段としての投入物を引けばよい。それぞれ、コメの純生産物は 10 万トン -2 万トン -1 万トン -1 万トン $=6$ 万トン。そして、サカナの純生産物は 1000 万尾 -200 万尾 $=800$ 万尾。スシの純生産物は生産手段としての投入物としては用いられないため、総生産がそのまま純生産物となるため 20 万食。よって解答は②。

問 9 と問 10 剰余生産物は、社会全体の純生産物から必要生産物を引いたものである。それぞれ、コメの必要生産物は 0.32 トン \times 労働者 10 万人 $=3.2$ 万トン。コメの剰余生産物は 6 万トン -3.2 万トン $=2.8$ 万トン。サカナの必要生産物は純生産物のすべてが割り当てられるため、800 万尾。剰余生産物はゼロ。スシについても、当初の設定では、すべての純生産物が剰余生産物となるため 20 万食となる。必要生産物はゼロである。よって解答は問 9 が③、問 10 は③である。

問 11 コメ 1 トンの投入労働量はコメの生産にかかわる直接・間接の労働時間をコメ生産部門の純生産物で割ればよい。計算式は $\{4$ 万人 $\times 1000$ 時間/人 $\} \div \{10$ 万トン -2 万トン $\} =500$ 時間/トンとなる。解答は⑤。

問 12 サカナ一尾あたりの投入労働量は、サカナ生産に直接投入される労働時間と、サカナ生産のために生産手段として投入される部分の間接労働とを加えて、それをサカナ生産部門内の純生産物で割ればよい。 $\{(5$ 万人 $\times 1000$ 時間/人 $) + (1$ 万トン $\times 500$ 時間/トン $\} \div 1000$ 万尾 $=5.5$ 時間/尾 (解答は⑥)。

問 13 スシ 1 食あたりの投入労働量は、 $\{(1$ 万人 $\times 1000$ 時間/人 $) + (1$ 万トン $\times 500$ 時間/トン $) + (200$ 万尾 $\times 5.5$ 時間/尾 $\} \div 20$ 万食 $=130$ 時間/尾 (解答は③)。

問 14 この島の労働者の一人あたり必要労働時間は、労働者 1 人が消費する (受け取る) 商品の量を計算し、その商品の量の投入労働を計算すればよい。労働者 1 人が消費する量は、サカナ純生産 800 万尾 \div 労働者 10 万人 $=80$ 尾となる。コメは 0.32 トン。よって、必要労働時間は各商品の投入労働量を参考に (問 11 から問 13 で計算)、 80 尾 $\times 5.5$ 時間/尾 $+$

0.32 トン×500 時間／トン＝600 時間となる。解答は⑥。

問 15 この島の労働者の一人あたり剰余労働時間は、一人あたり年間労働時間から労働者の一人あたり必要労働時間を差し引けばよい。よって、1000 時間 - 600 時間＝400 時間 (③)。

B

問 16 新たに労働者が各自年々スシ 1 食を受け取るケースを考察している。このケースにおけるこの島全体の必要生産物は、スシ 1 食×10 万人＝10 万食。解答は問 9 の必要生産物にこのスシ 10 万食を加えた③ (コメ 3.2 万トン、サカナ 800 万尾、スシ 10 万食)。

問 17 この島全体の剰余生産物は、前問で計算した必要生産物を純生産物から引けばよい。コメ 6 万トン-3.2 万トン＝2.8 万トン、サカナ 0 尾、スシ 20 万食-10 万食＝10 万食 (③)。

問 18 この島の労働者の一人あたり必要労働時間の計算方法は問 14 で述べた。問 14 の結果も参考にすると、労働者 1 人が消費する量は、サカナ 80 尾となる。コメは 0.32 トン。スシは年 1 食。よって、必要生産物は問 14 に比して 1 食／人×130 時間＝130 時間／人ほど増大する。よって 730 時間となる。解答は⑦。

問 19 この島の労働者の一人あたり剰余労働時間は、一人あたり年間労働時間から労働者の一人あたり必要労働時間を差し引けばよい。問 15 のケースと比べて、増大した 130 時間の必要労働時間分だけ減少する。よって、270 時間 (解答は②)。

C

問 20 先ず、サカナ 1 尾あたりの投入労働量のうちの直接労働が 8 割にまで減少するのであるから、新しい投入労働量は、 $\{(0.8 \times 5 \text{ 万人} \times 1000 \text{ 時間} / \text{人}) + (1 \text{ 万トン} \times 500 \text{ 時間} / \text{トン})\} \div 1000 \text{ 万尾} = 4.5 \text{ 時間} / \text{尾}$ (解答は⑥)。

問 21 前問より、従来のサカナ 1 尾の投入労働量 5.5 時間との差が 1 時間／尾であることがわかる。この投入労働量の減少によって浮く労働量は、1 時間／尾×(サカナ生産部門内の純生産 800 万尾＋スシ産業に投入されるサカナ 200 万尾)＝1000 万時間。さらにこの浮いた労働を用いて、コメ純生産を増大させるためには、この浮いた労働をコメ 1 トンの投入労働量で除せばよい。1000 万時間÷500 時間／トン＝2 万トンとなる (解答は②)。

問 22 この島全体の剰余生産物は、先の問い (問 10) で計算した剰余生産物 (コメ 2.8 トンとスシ 20 万食) に、新たに浮いた労働で生産したコメ 2 万トンを加えたものである。よって、解答はコメ 4.8 トンとスシ 20 万食である (②)。

問 23 問 14 を参考に労働者一人当たり必要労働時間を計算すればよい。よって、必要生産物は各商品の投入労働量を参考に（コメのケースは問 11 とサカナのケースは問 20）、 $80 \text{ 尾} \times 4.5 \text{ 時間/尾} + 0.32 \text{ トン} \times 500 \text{ 時間/トン} = 520 \text{ 時間}$ となる。解答は⑤。

問 24 労働者一人当たり剰余労働時間は、一人当たり労働時間 1000 時間から 520 時間を差し引けばよい。よって、480 時間（④）。

III

問 25 と問 26 相対的剰余価値生産とは、労働者が受け取る消費財の量は一定で、かつ労働者の年間労働時間も一定のもとで、消費財の投入労働量が減少することで、一人当たりまたは社会全体の剰余労働時間が増大することである。よって解答は問 25 が②、問 26 は③となる。

問 27 本源的蓄積の中で生じる労働者の自由とは、テキスト第 5 章の 118 ページにて詳細を記している。その中で、封建制社会のもとで、当初、農具などの生産手段を持つ農奴であったものが、農地を追われ生産手段から切り離された状態を示し、さらに労働者となる可能性がつけられたことを説明するものであるから、解答選択肢のうちの②生産手段からの自由がまず該当する。そして、農奴が主流であった封建制社会では、居住する地域や職業の選択の自由はないという状態との比較で、先の事柄は、職業選択の自由があるとみなせる（資本家が労働者を実際に雇用するかどうか別問題だが）。よって①も正答である。

以上

文献

松尾匡著（2010）『図解雑学マルクス経済学』、ナツメ社。